

中国が馬鈴薯を第4の主食化

一般社団法人日本生産者
GAP協会 常務理事

石谷 孝佑

2015年1月8日に中国農業部が「馬鈴薯を第4の主食にする」と記者発表した。当日、中国農業科学院の研究者である私の友人がテレビに出て解説をしていた。翌9日には、北京を代表する「新京報」が1頁を割いて特集した。「何故馬鈴薯が主食として優れているのか」という問いに答える形で、記事が作られた。

主食は一般に長期保存のできる穀物が選ばれ、中国では、米、トウモロコシ、小麦が主食になっており、この度、これに加えて「第4の主食として馬鈴薯を入れた」ということになる。

いも類の生産は、世界で中国が最も多く、特に甘藷については、世界の7割近いシェアを持っており、次いでアフリカ諸国の生産が多くなっている。中国における甘藷の用途は、過去には豚の飼料用が多かったが、現在は発酵原料や食用用途の開発が急速に進み、近代化されつつある。今回の馬鈴薯の主食化に伴って、甘藷も食用の道に勢いがついているように見える。

馬鈴薯の主食化の背景

この発表に先立って、「馬鈴薯の主食化と国家食糧安全保障問題」と題する会議が

北京で開催されており、馬鈴薯の主食化には、中国の食糧安全保障問題が背景にある。その馬鈴薯の主食化の理由としては、①穀類の増産余力が小さくなっていること、②耕地等の栽培環境が悪くなっていること、それに加えて、③消費者の栄養状態が偏ってきていることなどが挙げられている。

馬鈴薯の優位な点は、①ダイエットに良いことであり、米や小麦より優れ、トウモロコシに準ずるということ、②栽培しやすく、栽培に使う水の量が少なく、省肥料、省農薬、省力で栽培できること、③美味しく、様々な料理や加工に利用できること、④乾燥馬鈴薯は保存しやすく、米は1年、トウモロコシは1～2年、小麦は3年、馬鈴薯を乾燥した全粉の場合には保存可能期間を15年としているようである。

水分の多い馬鈴薯は、そのままでは保存性が悪いが、新聞報道によると、皮の付いたまま乾燥して保存すると「15年はもつ」とのこと。しかし、その乾燥法や貯蔵法、品質評価基準等についての詳細は定かではない。

どうして馬鈴薯が主食に格上げされたのか、その背景を少し探ってみた。先ず中国で生産されている主食の生産量を「中国農

業統計資料」(中国農業部)で見ると、以下のようになっている。なお、馬鈴薯については乾物重で示している。

2000年は米1.88億t、小麦0.99億t、

トウモロコシ1.06億t、馬鈴薯0.13億t

2011年は米2.01億t、小麦1.17億t、

トウモロコシ1.93億t、馬鈴薯0.18億t

2012年は米2.04億t、小麦1.21億t、

トウモロコシ2.06億t、馬鈴薯0.19億t

2013年は米2.04億t、小麦1.22億t、

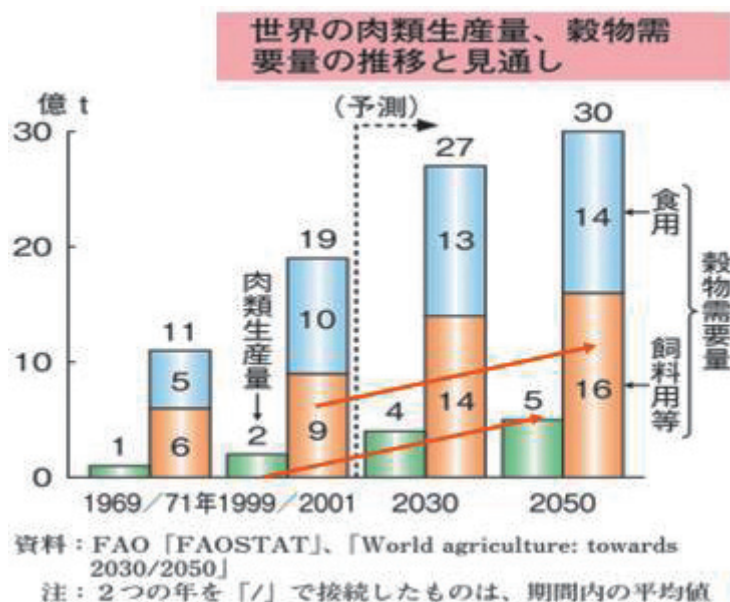
トウモロコシ2.18億t、馬鈴薯0.19億t

雑糧(雑穀)は主食にはなっていないが、中国の雑穀には豆類も含まれており、粟(175万t)、高粱(289万t)、その他の雑穀(402万t)、大豆(1,195万t)、その他の豆類(400万t)など、かなりの量(2,461万t:2013年)が生産され、主食に準ずる食べ方がされている。これらの生産量の数値を見ると、米と小麦の生産は頭打ちであり、トウモロコシと馬鈴薯はまだ増える可能性があるということのようである。一方で、大豆などの豆類の生産はほぼ維持され

ているものの、いわゆる雑穀の生産量は減少の一途をたどっている。

これに輸入穀物が加わることになるが、2006年までは、穀物生産が充分にあり、1,000万tほど輸出をしていたが、2013/2014年には史上最高の大豊作にもかかわらず、逆に2,200万tの穀物を輸入し、大豆と併せると7,000万t以上も輸入するようになっている。この大量の穀物輸入の背景には、増大し続ける飼料需要があるようだ。

中国は、これまで食糧自給率を95%に、年間の食糧備蓄量を50%以上に設定してきたが、国際的には安定な食糧備蓄量は20%以上が目安とされている。そのため、これまで中国では、食糧の国内生産にこだわり、2004年以来、米、小麦、トウモロコシ、大豆、なたねを対象に価格支持政策を行っており、買上げ価格を上げることによって農家の穀物栽培への意欲を高めてきた。そのため、安い国際市場の穀物を輸入せず、高い国内生産の穀物に頼ることを続けてき



た。

しかしここ^{たが}にきて、この籾が外れつつある。この背景には、①穀倉地帯の華北平原の地下水位が急速に低下しつつあること、②耕地が工業用地や住宅地など農業以外に多く利用されるようになり、耕地面積が少なくなっていること、③長年の肥料・農薬を多投してきたため、土壌が疲弊し、環境汚染も酷くなっていること、④近年、気象災害が多くなっていること、などが挙げられている。

そこで、この度の「馬鈴薯の主食化」に踏み切ったものとみられる。馬鈴薯は、既に述べたように、何よりも生産のための灌漑水が少なくて済むことである。また、トウモロコシが「肥料食い」なのに対して、肥料が少なくて済み、農薬もトータルの労働時間も少なくて済むメリットがある。さらに、単収から見ると、中国では先進国の半分か3分の1にとどまっており、耕地面積が増えない現状の下で、生産量を増やす大きな余力があると言えるし、併せて主食に指定することにより、資金が投入されれば、新品種や効率的な栽培技術の開発が加速され、食糧安全保障問題の解決の一助になるのではないかと期待されている。

中国における食糧問題の現状

中国の食糧問題は、地球規模の問題として国内外から関心が持たれてきた。米国のワールドウォッチ研究所のレスター・ブラウン元所長は、1994年に「だれが中国を養うのか」～迫りくる食糧危機の時代～という書籍を出版し、地球規模の食糧問題に警告を発したが、中国政府による食糧増産の

努力により一時的には回避された。ブラウン氏はまた、1995年に「21世紀は飢餓の世紀である」という書籍を出版し、「食糧生産に突然ブレーキがかかり、人口は年に1億人近く増えている。危機が明らかになった時には手遅れになる。食糧価格は高騰し、輸出は制限され、飢えが世界に溢れ、社会が突然機能しなくなる」と重ねて食糧危機に強い警告を発している。ブラウン氏はさらに、2005年に「フード・セキュリティ」～人口13億人の中国が世界の穀物を買占める日～という書籍を出版して再度警告している。ブラウン氏は「世界の食糧生産は不安定な状況にある。それを解決するためには、農地を簡単に潰すのをやめ、農業に充分水を回し、地球温暖化を防止することである」と説いている。

その直後の2007年から中国の食糧輸入が始まり、主に飼料を賄うために毎年1,700万tもの食糧需要が増加しており、現在は、輸入量が穀物生産全体の10%を超えており、自給率は90%以下になっているとみられている。

中国は、大豆を大量に輸入しており、今では小麦や米を輸入している。「中国がトウモロコシを輸入する様になったら大変だ」と言われてきたが、それが少しずつ現実のものになっているようである。世界の食糧が足りなくなり、近い将来食糧危機が来ると言われており、穀物価格が高止まりしている昨今、中国が輸入ばかりに頼らず、自前の作物で補完する意味でも、「馬鈴薯を第4の主食化」は意味があるものといえる。